
ネトゲの女

沢村つかさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネトゲの女

【Zコード】

Z0669M

【作者名】

沢村つかさ

【あらすじ】

ネトゲプレイヤーで元キヤバ嬢、現クラブ経営者。

そんな彼女が日々ネットでリアルで日常を送つていく。

そんな半分事実に基づいたお話。ネトゲという言葉が分かる人は楽しめる?かと思います。

分からぬ人には少し楽しみにくいかもしれません。

ガールズラブというカテは入れてますが過激な表現はありません。

私(梶本ツバサ)と同居人やネトゲ仲間との日常をお楽しみください。

日常のストーリー（前書き）

ネトゲという言葉が分かる人は楽しめる？かと思います。
分からぬ人には少し楽しみにいくかもしません。

ガールズラブというカテは入れてますが過激な表現はありません。
私（梶本ツバサ）と同居人（シャルロット）やネトゲ仲間との日常
をお楽しみください。

「「」め、ちよ離席」カタタツとチャットを打ち込む。

「あいあい」「いてらー」等、ネット世界からリアクションが返つているようだが全て見る間もなくディスプレイの電源だけを切る。

ちょうどダンジョンを回り終えたところで助かった。

でなければ戦闘パーティに穴を空けることになるからだ。

リアル世界では仕事用の携帯がサイドテーブルでやかましい音を立てている。

時刻は23時。夜の街はまだ活気にあふれていことだらう。

それゆえに、ちとイヤな予感がする。

「何? トラブル?」

「あ、梶本さん。すみません今電話大丈夫ですか?」

「大丈夫だから出てんだけ?」

「すみません。実は常連の石上さんなんですが、どうしても梶本さんに出で欲しいみたいで・・・」

「ヤだよ、もう遅いし」

「そこ、何とかなりませんかねえ。出でくれたらボトル入れるものやぶさかないと仰るもので・・・」

あのオヤジもう少し羽振り良ければ愛想してあげてもいいんだけどね

「そのボトル、鏡用だつたら怒るからね

「出でもらえるんですか?」

「どうせもう私のレクサスにうちに寄越してるんでしょ?」

「バレてしまひたか

つてことはあと10分もないか。メイクだけ適当に見れるよつて髪と服はあつちで何とかしよう

「バレバレ。どうせショウ君でしょう？彼、運転ヘタつぴだからあまり私の触らせないでよね」

「すみません、彼くらいしか手が空かなくて」「今日、入つてるんだ？」

「ええ、それはもう。金曜日ですから」

「髪やれる子いるよね？着いたらすぐ出来るようにしておつて。あと服は私のストックから一着出しどう？」

「はい、大丈夫です」

「色、カブらないの出しなせよ？」

「承知します！」

「店、入つてるんだつたらあなたもボーイの真似事くらいしておきなさい」

「はい、ではお待ちします」

クラブオーナーにしていまだ半現役。

先代からの「」指名で何だかんだとこの歳まで（断じて30は越えていない）この業界の人。

たまに我慢な古参の客の要請でもない限り店には出ず、普段は事務処理や経営指南。

お気楽な暮らしだはある。

そのお陰で割と暇な時間を得た私はネットゲームに興じていた。最初は割りと軽いモノからだつたが。

今やつているのはいわゆるMMORPGというヤツだ。いい歳こいてファンタジーもないと思うかもしぬないがコレがなかなか面白い。

服飾スキルを磨いて着飾つたり、ネット上で募ったプレイヤーで協力して『デカいドラゴンを倒したり。生活に冒険に戦闘こと、まさにファンタジー世界の箱庭。

あ、今日店出た分を日払いにして帰りにWEBマネー買って新しく実装されたガチャ少しありう・・・

適当に（どうせ薄暗い店内なので細部までは見えはしない）メイクを整え、勤怠表に印を通す。

金曜だところに中々ナメた出勤率である。もう少し『女のナ』を増やすべきか少し悩むといふのである。

そりそりとこちらに迎えの車が到着する。

「どれ、ひと稼ぎするか」

誰に言つてもなくひとつひびいて上着を引っ掛け玄関を出た。

影武者シャルロット（前書き）

もう一人の主人公？シャルロットが登場します。

影武者シャルロット

バタバタと出かける音にもぞりとヘッドフォンを外す。

今週はたくさん働いたからたまには金曜でも休んでいいかと休んでいた午後11時。

部屋の戸を開けて「ツバサあ？」と問いかけるも応答ナシ。

へんじがないただのおでかけのようだ。

「ウへく」

文字にするとそんな笑みを浮かべ、ツバサの部屋へ向かう。もちろん住人が不在なのは承知の上だ。

力チャリと小さな音を立てて田舎での戸を開ける。

ふわりとツバサ愛用の香水、レンピカの甘い香りがする。

電気は消えているもののフオーンと低いacicのファンの音が聞こえる。

勝手知つたる他人の部屋。

電気を点灯させると、次いで2つのディスプレイの電源をONにする。よほど慌てて出かけたのか画面にロックはかっていない。もちろんネットゲにもログインしたままである。

メインのディスプレイには愛らしいキャラクターがちょこんと仲間と思しきキャラクターと座っている。

チャットログを見るに、ちょうどダンジョン回りがひと段落したところのようで次の狩場を決めていくようだつた。

「ただいまー」

しつつチャットを打ち込む。

「おかー」だの「早www」など早速反応が返つてくる。

ネット上の『ツバサ』が帰つてきたことから、頭数が揃つたのか先程よりも高難易度のダンジョンに行くようだ。

パーティは5人、全員同じギルドに属している顔馴染みだ。

「Here we GO!」わざと英文のチャットを入れる。

顔馴染みの面々からは「ちょwww入れ替わってるwww」「これツバサさんじゃねえwww」「シャルちゃんこんばんわwww」などリアクションが返つてくる。

そう、私達はたまに入れ替わるのだ。

正確には私がツバサの隙を突いてキャラを乗っ取つてているだけなのがだが。

運営会社の規約的には違反らしい（1キャラを複数人で使うこと）のだが、こればかりは証明する手段がないので処罰のしようがないだろう。ちなみに違反だと知ったのは入れ替わりを始めてから1年以上経つてからでそれまで誰にも指摘されたこともなかった（笑）地道なトレーニングや謎解きが得意でリアルタイムの戦闘やタイミングを合わせるマーゲーム等が苦手なツバサと正反対の『シャルちゃん』それが私だ。

仲間内では暗黙の了解というか、誰もその入れ替わりを咎める者はいない。

むしろ戦闘時は戦力アップでラッキーくらいのノリだ。

そんな訳で今夜はちょっとばかりファンタジーの世界でひと暴れしてやううと「ニヤ」と笑う。

私はシャルロット。

一応、生まれも育ちも生糞のフランス人。日本語はそれなりに達者であると思うが仕事の時はあえてカタコトにすることもある（その方が可愛いらしい）

縁あって梶本ツバサと一緒に暮らす事になり、ツバサがオーナーのクラブで適度に働いて適度に怠けた日本ライフを楽しんでいる。

どうこう経緯でツバサと出会ったかはまた別のお話で。

ロードアダプタの種類

午前2時。

1時には店仕舞いを始めたハズが勤怠管理や業務態度の注意など、真面目にオーナー業をこなしていたらいつの間にかこんな時間になってしまっていた。

帰る頃には窓は明るくなっているだろう。

『店長、君と戸締りをして店を後にする。

ちやつかり日払い扱いにした本日の出勤分の4千円をなんの迷いもなく全てコンビニでWEBマネーに変換する。

「これでガチャ新実装の衣装ゲットだぜッ」

小声で無駄な気合を入れてみた。

待たせてあるレクサスに乗り込み、ショウ君に白腹で買った缶コーヒーを渡す「お疲れさま、宜しくね」

ショウ君はこれから私を送り届けてからレクサスを月極駐車場に戻し、帰宅しなければならない。可愛そう。

いや、私のせいなのだが（笑）

すこしうつむいたところで城に帰宅。

城と言つても古い旅館を改装した社員寮も兼ねるボロ家である。いや、風情がある。ということにしておこう。

玄関を開け、階段を上ると、早めに戻つていた女の子達がシャワー上がりで「お疲れ様です」と通り過ぎてゆく。

さて、まだネットの住人達は活動しているだろうか？
さすがにもう寝落ちしてるかなーと思いつながら自室に戻る。

と、そこでシャルロットが寝落ちしていた。

私のPCの前で、涎垂らして・・・

画面の中のキャラクターも満身創痍、装備もボロボロといった感じ。
チャットログを見るに相当ハードな所を周回したようだ。
おかげさまでそれなりにキャラは成長しているようだが・・・
他の人々も時間が時間だけにその場で寝落ちしてゐる者やログアウト
してしまっているメンツもいるようだ。

一応チャットで声をかけてみるが、リアクションはない。

能天気な寝顔のフランス人を尻目に風呂へ行くことにした。
あとで蹴り起こしてやろうと心に決めて。

遅れたアバン（前書き）

登場人物や物語の背景を少し整理しておこうと思います。
普通最初にやるべきことですね。すみません。

遅れたアバン

風呂上り。

適当なメイクの後処理をして、くしゃくしゃの髪の毛を戻す。

旅館時代のものをそのまま改装時に残した庭の見える縁側で寛ぐ。

元旅館のカウンターとロビーは各自の私物やら共用の冷蔵庫などあつたり、普通の家の居間の様相となつてゐる。

そこから持ち出した濃紺の缶とその辺に落ちてた（多分置いてあつただけ）ガスライター。

小さめの缶を開けるとふわりと柔らかい『Peace』の香りがする。

チョイとキツめだが煙草はこれに限るのだ。

フィルターなど無いので吸い口側を少し押し潰して浅く咥える。点火、スッと一口目の芳香が広がる。

この瞬間が私の『平和』であり、その象徴でもある時間だった。

点火に使つたライターをよく見るとSILVER MATCHと刻印がある。

「フランス製か・・・」

確か、フランスのメーカーの品だつたハズだ。記憶が正しければ attitudeといつ品。

商売上、ここに出入りする誰もがライターを持つてゐる。

自分で喫煙を使わざとも仕事で必ず必要なアイテムであり、ちょっとした話題も提供してくれる重要な小道具でもある。

はて、これは誰のライターだろうか。

重厚なシルバーは使い込まれた擦り傷が年季を物語つていて、
ブラックのドット模様が特徴的である。

いや、よく見るとブラックではなくカーボン調のようである。

「・・・あ、アレのか」

私の部屋で寝 lorsqueていたシャルロットのだ。

また、そのへんに置き忘れて出店間際になつて騒ぐのだ。

このモデルのライターの愛用者は数人いたハズだがカーボン調にカ
スタムして使うのはアレくらいのものだ。

ちなみに私はガスライターだとガス残量が分かり難いのでタンク式
のオイルライターを愛用している。本日は急な出店だったので自室
に置き忘れてしまったのだ。

この旅館改社員寮には一十数名ほどが生活している訳だがそれが全
て『女の子』ではない。中には子連れ、という者もいるし。
その子だけが暮らしており母親はアフターに忙しくほとんど不在と
いう者もいる。

皆、気心知れた仲間であると同時にライバル。
時に新人が来たり、結婚や転職で出て行く者もいる。

ちなみに私は自宅という一軒家を持つていたりする。

ほとんど暮らさなかつたし、今でもほとんどコツチで生活している
のでまるでモデルハウスのようになつている。

と、いうのも私が任されているクラブは私の旦那のモノだったのだ。
それが2年前病氣であつさり逝つて以来、私が引き継いでいる。

旦那はここいらではちよいと名の通つた旧家の一人息子だったので、
義父にクラブの権利は返す予定だったのだが・・・どういう訳かこ
うなつてしまつた。義父、つまりはグループ企業を束ねる社長様な

のだがどうにも私を気に入つたらしく息子に任せていた分は君に任せると言われ、現在に至る。

旦那と出会つたのは夜の街ではない。

夜の峠のP.A.だつた。

旦那の愛車は初期型のロードスター。

私の愛車は赤のカプチーノ。どちらもオープンカー

元来、クルマ好きであつた私にはそのロードスターが古い型でりながら愛され手を尽くして整備されているのが分かつた。自分のカプチーノなどは当時訳あつて無職だったので金がなかつた為ボロボロであつた（苦笑）

「峠で幽霊が出るそなんですよ」

その時の旦那は言つた。

「はあ」

新手のナンパ?とも思つたがそういう風でもない

「下りでシルビアやらランエボを抜き去る赤いカプチーノがいるそ
うなんですが、ドライバーが乗つてないんだそうですよ」

旦那は続けた。

「・・・」

「・・・それ、私が?（身に覚えはあつたが）

「あなたですよね?赤いカプチーノの幽霊さんつて」

旦那は幽霊の正体見たり枯れ尾花とでもいうような表情だつた。

私は、身長が小さかったのだ。

それで恐らく抜き去られる一瞬ではドライバー不在のよう見えたのだろうと、このうとこのが旦那の言い分だった。

「お手合せ願えませんか?」

「下りで?」

「勿論。」

「そのロードスターで?」

「勿論。」

「イジつてあるみたいだけど勝てる訳ないよ」

「どうして?」

「自分で言つたじゃないシルビアやランエボすら抜き去つたって」「たかだか1600っこのロードスターじゃ勝てないと?」

「理論的に考えてそうでしょう? もう時間も遅いし帰るわ」

「じゃあいじつしましょ?」

そのままいつて旦那は私に札束を渡した。

100万円である。

「・・・え?」

「お手合せ頂けて私があなたに勝てなかつたらそれをそのままもつて帰つて下せつて結構です」

惱みびじひである。無職で金欠に100万円はテカすぎた。

「いいわ、じゃあもし私が負けたり?」

金の力は偉大である。

「私の経営するクラブで働いてください」

「それってキヤバクラ?」

「そうとも言います。どっちに転んでも損はないと思いますが?」

旦那は人の良さそうな笑顔で賭けレースを持ちかけた。

・・・・・

結果、私は参加賞として1万円と名刺を貰った。

「では午後4時にお待ちします」

旦那は涼しい顔でそう言って幌を開けてオープンで朝焼けの街へ帰つて行つた。

梶本ツバサ。23歳の夏、なんだか良く分からぬまま就職先と旦那様を得ることになった。いわゆる一目惚れな訳だが。

それから私はクラブで働くようになり、旦那と結婚する。結婚してからも現役で店には出ていた。

2年前までは。

新婚気分もさめやらぬうちに旦那は倒れそのまま数日後逝つてしまつた。

「後の事は頼む」

それだけ言い残して。

形見と言えるのはあのロードスターくらいのものだった。

旦那が逝つてから、私はまた峠に通うようになった。

ある日明け方まで走つて帰り道、繁華街を通るとスースケースをカラカラ引きずりながら明らかに拳動不審な外国人を見つけた。

なんでこんな時間にこんな場所に？

「Can I help you?」

声をかけて振り向いたその姿を見て驚いた。

まるでお人形さん。淡いブルーの瞳にサラッサラの金髪。整った顔立ちは本当に同じ人類かといつほどであった。

「あ。すみません。タクシーとか見つからなくて困つてたんですね」

モロ日本語でした。
とても流暢な。

「こんな時間じゃ見つからないよ、とりあえず乗りなよ」

「いいの？ ありがと！」

「で、どこに行きたかった訳？」

「この地図のここにある、向川旅館に行きたかったのだけど」「えーと……」

「……？」

その地図は相当古いようですよ外人さん……

その旅館は今、私達の社員寮です……てか私の住処です。

事情を説明し、空き部屋にとりあえずゲストとして泊まつてもうつ
ことにした。

日本にあこがれ、日本各地を行き当たりばつ当たりな感じで旅してきましたこの元気な外人さんもとい「シャルロット」の旅はこの旅館改め社員寮で終わりを告げた。

一応、経営責任者になつてはいた私は彼女を雇用する手続きをし母国の家族に自分達が面倒を見る旨を伝え。彼女は私達と暮すことになった。社長様、もとい大旦那様もシャルロットが気に入つたらしく色々面倒な手続きには手を貸してくれた。

「ツバサあ大好きッ！」

日本に住むのが夢であつた彼女はそれを叶えてくれた私が大層お気に入りのようである。

お店の方でも外見の美しさも去ることながら日本語が達者だつたこともありすぐに人気者になつた。

こうして私は従業員一同と拾つてきたフランス人と同居しながら経営者をしつつネットゲにハマつていた。

三本目のピースをもみ消し、自室へ向かう。

くだんのフランス人を蹴り起こしに行くためにである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0669m/>

ネトゲの女

2010年10月10日01時24分発行